

「改正鼓譜（長門練兵場蔵版）」（一般郷土資料1332）

戦いノオト⑥

## 銃陣鼓譜 ～西洋音楽との出会い～

### 【西洋銃陣の導入と西洋音楽】

基石を線でつなぎ合わせたような記号が書かれている上の写真は、慶応2年（1866）に長州藩で刊行された「長門練兵場蔵版改正鼓譜」という西洋太鼓（スネアドラム）の教練書です。

長州藩では、安政6年（1859）に西洋式の軍隊（西洋銃陣）への刷新を図り、これをオランダから学びました。西洋式の軍隊では、号令やドラムの信号音で一斉に動いたり、行進したりする集団行動が不可欠でした。そのため、西洋式の軍備と一体のものとして、それまで耳にすることのなかった新しい音—西洋音楽が入ってきました。

西洋銃陣においては、集団行動の信号音を発する鼓手（ドラマー）はとりわけ重要で、これを速やかに養成しなければなりません。オランダ人が使っていたドラムの楽譜は五線譜と音符で書かれていましたが、当時の人々は、このような楽譜になじみがありませんでした。そこで、和太鼓の鼓譜の表記法を参考にして、基石を線でつなぎ合わせたような記号を用い、左右の手の動きを図で示した独特な「鼓譜」が作られました。

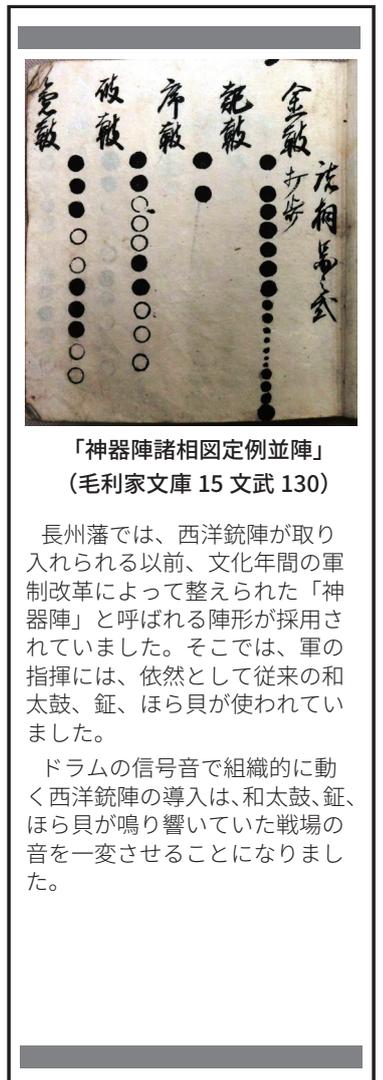
見た目はとても西洋音楽の楽譜には見えませんが、スネアドラムを用いて演奏されるリズムは、従来の和太鼓によるものとは全く異なるものでした。

### 【鼓譜刊行の目的】

「改正鼓譜」の序文に刊行の目的が次のように記されています。

夫、鼙鼓（へいこ）ハ、進退動止ノ由ルトコロナレバ、兵事ニ与カル者知ラズンバアルベカラズ。近歳、西洋銃陣其ノ他長ズル所ヲ採り用ユベキコトナレバ、鼓法モ亦武技ノ一端、子弟タル者涉ラズンバアルベカラズ、鼓法ノ正不正、音韻ノ協不協ニテ三軍ノ勇怯勝敗ニモ拘ルコトナレバ、必ズ忽ニスベカラズ、因テ此ノ鼓譜ヲ上梓シテ童蒙瞻写ノ勞ト誤脱ノ弊ヲ省キ、兵制萬分ノ一ニ補アランコトヲ冀フナリ、  
歳次丙寅十月誌

「鼓法も武技の一つである。鼓法の正確さが軍の士気さらには勝敗に関わるので、これを疎かにしてはならない。この鼓譜を刊行する目的は筆写の労と、筆写のミス無くすことにある」と、西洋銃陣における正確なドラム演奏の重要性が説かれています。



「神器陣諸相図定例並陣」  
（毛利家文庫 15 文武 130）

長州藩では、西洋銃陣が取り入れられる以前、文化年間の軍制改革によって整えられた「神器陣」と呼ばれる陣形が採用されていました。そこでは、軍の指揮には、依然として従来の和太鼓、鉦、ほら貝が使われていました。

ドラムの信号音で組織的に動く西洋銃陣の導入は、和太鼓、鉦、ほら貝が鳴り響いていた戦場の音を一変させることになりました。

【西洋太鼓の打ち方の習得】

当時、どのようにして西洋太鼓の奏法が学ばれていたのでしょうか。明治35年（1902）に刊行された「幕末百話」に西洋太鼓を伝習した古老のつぎのような話が載せてあります。

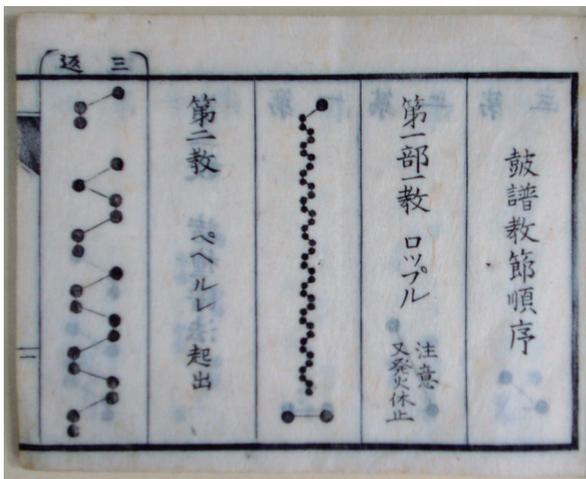
……まずイロハを申すと、ロップルとて2つ打ちを教える。次に5つ打ち、ホロロム。次に9つ打ち、ホロロンロン。次にエン、テイ。そしてだんだんと重複したものにします。

これによると、基礎的な打ち方から始まり、次第に複雑なリズムを習得していたようです。また、リズムの習得にあたっては「ホロロム」とか「ホロロンロン」などと口ずさむ、邦楽を学ぶ時の口唱歌が用いられていたようです。

鼓譜においても、様々な基礎的な打ち方を学んだ後、行進曲や「進め」「止まれ」、「集合」「発火」など行動を指示するためのリズムを習得するように編集されています。

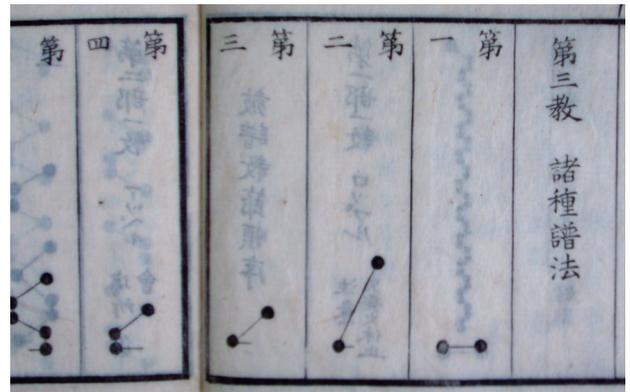
【ロップル】

左左右右左左…と2度ずつ繰り返し打つロール打ちのことで、初学者はまず、この打ち方を学びました、このロップルには「注意」や「発火休止」などの指示内容があてられていました。



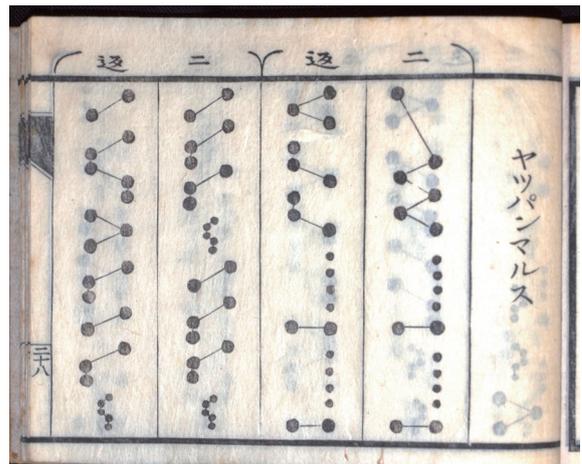
【諸種鼓法】

様々な基本となる打ち方が示されています。



【5つの行進曲】

行進の時に用いる曲で、ヤッパンマルスやフランスマルスなど5つの行進曲が収録されています。写真はヤッパンマルスの部分です。「ヤッパン」は日本、「マルス」はマーチのことで、この「日本行進曲」が日本で最初に作られた西洋音楽と言われています。



【合図のための様々な鼓譜】

それぞれのドラムのリズムには、行動の指示内容があてられていました。

